

令和元年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

I. 事業要旨

このプログラムの目的は、行動障害がある発達障害児者を持つ家族に対して、家族を含む関係者会議や家庭へのコンサルテーションを行うことにより、家族が本人に対する関わり方を学び、本人が家庭の中で安定して生活することである。

平成 26 年度から令和元年度までは、福祉サービス事業所や教育関係等の支援者を対象とした研修会を開催した。平成 26～27 年度は実践報告やシンポジウムを行い、平成 28～令和元年度は行動分析に関する基礎講義と事例検討の演習、参加者からの実践報告等のフォローアップ研修会を行った。6 年間継続した結果、温度差があるものの、研修会で学んだことを、現場の中で実践するようになった事業所がみられだした。その一方で、行動障害がある自閉症児者をもつ家族の中には、子どもへの対応方法が分からず、あるいは知っていても家族が実行することが難しいため、途方に暮れている事例がある。また、家庭で生活することが困難になり、施設入所あるいは精神科病院に入院する場合もある。そのため今年度は、知的障害があり行動障害のある自閉症児の家族を対象として、家庭へのコンサルテーションを行うこととした。

事業を実施するに当たって、ワーキンググループを立ち上げ、事業内容に対する意見をもらった。その結果、家庭支援は、①家族や相談支援事業所、学校、放課後デイサービス事業所等本人を取り巻く関係者で支援会議を行い、特性等の共通理解及び統一した支援を行う、②支援計画は、(1)「一日を過ごしやすくするための取り組み」という視点、(2)本人の気持ちに寄り添う支援、(3) (1)、(2)のためには、環境の構造化等による受容性コミュニケーションと意思決定等表現性コミュニケーションの取り組み、行動観察による機能分析の取り組みが必要である、という意見であった。

加えて、家庭支援を行うには、家庭で実施可能な取り組みや親の気持ち等を理解しておくことが必要であるという意見があがったため、自閉症児者をもつ母親 6 名へインタビューを行った。分析の結果、知的障害があり行動問題がある自閉症児者への母親の関わりは、《子どもに必要な関わり方が分かっている》プロセスであることが分かった。また、得られた内容を、1. 家族への支援、2. 親が子どもに必要な関わり、3. 地域支援体制整備に分類した。

ワーキンググループや母親へのインタビュー調査結果、及び企画・推進委員会の意見を基に、事業を実施していくこととした。

今年度は、昨年度からの対象児である、睡眠の乱れ・自傷・他害行動・かんしゃく等がある、特別支援学校小学部 2 年生 8 歳の男児を持つ家庭と、自傷・他害

行動・パニック等がある、特別支援学校小学部6年生の男児を対象とすることとした。2事例とも、北九州市が発行しているサポートファイル「りあん」をアセスメントツールとして、つばさが家庭、学校、放課後等デイサービス事業所等を訪問して、情報収集を行った。その後、母親・関係機関で支援会議を行い、情報の共有及び支援目標の抽出、支援方法を決定した。2事例とも支援目標は、母親の要望も考慮し、身辺自立・行動問題・表出性コミュニケーションに関する目標を抽出した。年度途中及び年度末に係関係者会議を行い、支援目標の経過及び今後の支援について協議した。支援目標は一部を除き家庭・学校・各事業所で実施されており、行動問題は軽減していた。その後、母親へのインタビュー及び関係機関へのアンケート調査を行った。その結果、サポートファイル「りあん」を使用することや関係者会議を実施し、支援目標や手立ての統一化を図ることの有効性をほぼ全員が認識していた。

2年間実施した結果、サポートファイル「りあん」を活用して、家族を含む関係者会議を行うことは、情報や対応方法の共有化を図り、支援目標に対して統一した取り組みを行う上で有効であった。

II. 事業目的

行動障害のある発達障害児者を持つ家族に対して、家族を含む関係者会議やチームによる家庭へのコンサルテーションを行うことにより、家族が本人に対する関わり方を学び、本人が家庭の中で安定して生活することを目的とする。

III. 事業の実施内容

家庭支援に関する事業を実施するに当たっては、各方面からの意見を参考にして計画を立てることが望ましいと考え、ワーキンググループを立ち上げ、会議を4回行った。その結果、家庭支援は、①家族や相談支援事業所、学校、放課後等デイサービス事業所等本人を取り巻く関係者で支援会議を行い、特性等の共通理解及び統一した支援を行う、②支援計画は、(1)「一日を過ごしやすくするための取り組み」という視点、(2)本人の気持ちに寄り添う支援、(3) (1)、(2)のためには、環境の構造化等による受容性コミュニケーションと意思決定等表現性コミュニケーションの取り組み、行動観察による機能分析の取り組みが必要である、という意見であった。

また、家庭支援を行うためには、家庭で実施可能な取り組みや親の気持ちを理解しておくことが必要であるという意見があがったため、行動問題があるものの、比較的安定している自閉症児者をもつ6名の母親へインタビューを行った。その結果、知的障害があり行動問題がある自閉症児者への母親の関わりは、《子どもに必要な関わり方が分かっていく》プロセスであることが分かった。《子どもに必要な関わり方が分かっていく》とは、【子どもに合った対応を追求する】、【子どもが安心する対応を理解していく】、【子どもに合った対応を認識する】を、何度も何度も繰り返すサイクルであった。また、インタビュー調査結果から得られ

た内容を、1. 家族への支援、2. 親が子どもに必要な関わり、3. 地域支援体制整備に分類して表1に示す。

表1 6名の母親へのインタビュー調査結果

カテゴリー	内容
家族への支援	<ul style="list-style-type: none"> ①子どもが乳幼児期から、家族が継続的に学ぶ場（知識・実践） ②家庭へのコンサルテーションを行う専門家（担当者、相談機関、民間専門家） ③母親が気兼ねなく参加できる居場所（保護者同士の集まり、親の会など） ④家族の大変さに寄り添い、労うことができる専門家（担当者、相談機関、民間専門家など）
家族が子どもに必要な関わり	<ul style="list-style-type: none"> ①視覚的に伝える（スケジュール、説明など） ②子どもからの表現性コミュニケーションの手立て ③子どもの意思を尊重する ④好きな活動を保障する ⑤こだわりにつき合う ⑥苦手さを把握し、事前準備を入念にし、成功体験を積み上げる
地域支援体制	<ul style="list-style-type: none"> ①専門家の育成 ②知的障害があり、行動障害があるASD児者をもつ家族が学ぶ場 ③家族同士で相談できる場

今年度は、昨年度からの対象児である、睡眠の乱れ・自傷・他害行動・かんしゃく等がある、特別支援学校小学部2年生8歳の男児（事例1）を持つ家庭と、自傷・他害行動・パニック等がある、特別支援学校小学部6年生の男児（事例2）を対象とすることとした。

2事例とも、北九州市が発行しているサポートファイル「りあん」をアセスメントツールとして、つばさが家庭、学校、放課後等デイサービス事業所等を訪問して、情報収集を行った。その後、母親・関係機関で支援会議を行い、情報の共有及び支援目標の抽出、支援方法を決定した。2事例とも支援目標は、母親の要望も考慮し、身辺自立・行動問題・表出性コミュニケーションに関する目標を抽出した。年度途中に関係者会議を再度行い、支援目標の結果及び今後の支援について協議した（資料2-2、2-3）。

支援目標については、対象児の年齢や状況、母親の希望、関係機関での状態等を考慮し、事例1については、昨年度と同じ課題である身辺自立（排泄、食事）、

コミュニケーション（受容性：「だめ」の伝え方、表現性：写真カードを使って、大人に伝える）、行動問題（胸を触ることへの対応）を具体的課題とした。翌年3月に再度関係者会議を行い、支援経過の確認を行った。事例2は、身辺自立（排泄）、コミュニケーション（表出性：本人から発信するコミュニケーション手段を増やす）、生活面（生活リズムを整える）、行動問題（人前で性器を触ることを減らす、落ち着いて過ごすことができる日を増やす）を課題とした。

効果検証に関しては、母親へのインタビュー及び関係機関へのアンケート調査（資料2-4）を行った。

IV. 分析、考察

1. 調査結果

① 母親へのインタビュー調査結果

年度末の関係者会議終了後、母親2名へインタビュー調査を行った。その結果を、表2に示す。

表2 母親2名へのインタビュー調査結果

項目	質問内容	結果
1. 支援目標について	①目標について、家で実行できましたか。	半分くらい実行できた。(2)
	②支援目標を家で実行することは、負担でしたか。	負担ではない。無理なくできる範囲で行った。(2)
	③②で「負担」の場合は、具体的に教えてください。	
	④より負担なく実行するには、どのようにすればよいと思いますか。	
2. サポートファイル「りあん」について	①サポートファイル「りあん」を活用することは、有効でしたか。	とても有効であった。(2)
	②「有効である」の場合、具体的に教えてください。	・過去と現在の状況を比較しやすい。それによってどういった時に、どういう傾向があるのか判断しやすい。 ・今後新たな関わりを持つ方へ、本人の性格や行動を理解してもらいやすい。
	③「有効ではない」場合、具体的に教えてください。	
	④サポートファイル「りあん」に変わるものとして、どのようなツールが適当だと思いますか。	電子化(スマートフォンやアプリ)すれば、もっと多くの人が手軽に利用すると思う。
3. 関係者会議	①関係者会議で協議することは、有効でしたか。	とても有効であった。

	②「有効である」の場合、具体的に教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・皆で把握できるので、一貫した療育ができることや、共有する事で刺激を受け、励みや意欲が上がり、すべてにとってプラスになっている。 ・普段の連絡帳以外の様子を知ることができて、学校で上手く行えている事等、事業所の方にも取り入れられるので、とても有効である。
	③「有効ではない」場合、具体的に教えてください。	
4. その他、	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者会議は、本当に子ども自身にも、親にも、関係者にとっても、とても意味のあるもので、有意義なものになっている。 ・りあんに関しては、利用している人はほとんどいない。今回のことで、自分はとても便利でいいものだ実感している。もっと多くの人に利用してもらうには、電子化によって手軽で便利に、担当者皆で共有できるようになればいいと思う。 	

② 関係機関へのアンケート調査結果

年度末の関係者会議終了後、特別支援学校、放課後デイサービス事業所、相談支援事業所へアンケート調査を行った。その結果を、表3に示す。

表3 関係機関へのアンケート調査結果（アンケート数7人）

項目	質問内容	結果
1. 支援目標について	①目標について、学校（事業所）で実行できましたか。	実行できた。（5） 直接支援ではない。（2）
	②支援目標を学校（事業所）で実行することは、負担でしたか。	負担ではなかった。（5） 直接支援ではないので分からない。（1）
	③②で「負担」の場合は、具体的に教えてください。	負担ではないが、難しさを感じる。
	④より負担なく実行するには、どのようにすればよいと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・他事業所等の取り組みを聞き、絵カードを取り入れようと思った。 ・一か所に集約する取組があれば、より良い。
ト 2. サポートファイル	①サポートファイル「りあん」を活用することは、有効でしたか。	有効である。（5） 無回答（1） 有効ではなかった。（1）
	②「有効である」の場合、具体的に教	・家、学校、事業所と、情報が共

	えてください。	有できた。(6) <ul style="list-style-type: none"> ・幼少期からの経過を知ることができる。 ・一日の流れや実態が、分かりやすく記載されている。 ・新人職員が本人の情報を把握するには、とても有効である。 ・同じ項目に対して、それぞれの事業所がどう対応しているのか分かりやすかった。 ・アセスメントを深めることができた。
	③「有効ではない」場合、具体的に教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・見やすい場所に置いていなかったことや、見る頻度が少ないため、内容を忘れてしまうことがあった。 ・成長期であるため、情報が現在と異なる所がある。
	④サポートファイル「りあん」に変わるものとして、どのようなツールが適当だと思いますか。	
3. 関係者会議について	①関係者会議で協議することは、有効でしたか。	有効(7)
	②「有効である」の場合、具体的に教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・家、各機関での、本児の実態が分かる。 ・他機関の進捗状況を把握できたと共に、情報共有することで、同じベクトルに向かって、目標設定できた。 ・各機関の支援方法を検討することができる。 ・家族の思い、本人の成長を皆で共有する機会がなかなかないので、大変良い。 ・各機関で一貫性のある支援ができる。
	③「有効ではない」場合、具体的に教えてください。	

4. そ の 他、	<ul style="list-style-type: none"> ・関わり方によって、子どもの成長が変わると思うので、良い取り組みはドン ドン取り入れたいと思う。 ・支援の経過の確認を、もう少し短期間でできると、もっと統一した支援が できると思う。
--------------------	--

2. 考察

今年度は、昨年度からの対象児である、睡眠の乱れ・自傷・他害行動・かんしゃく等がある、特別支援学校小学部2年生8歳の男児を持つ家庭と、自傷・他害行動・パニック等がある、特別支援学校小学部6年生の男児を持つ家庭を対象として、事業を実施した。ワーキンググループや6名の母親へのインタビュー調査結果及び企画・推進委員会の意見を基に、サポートファイル「りあん」を活用して、身辺自立・行動問題・表出性コミュニケーションに関する目標を抽出した。年度末の関係者会議では、支援目標は家庭・学校・各事業所で一部を除き実施されており、行動問題は軽減していることを確認した。

母親へのインタビューや関係機関へのアンケート調査結果からは、「1. 支援目標について」は、母親と直接支援を行っているスタッフは、全員実施できしており、ほぼ負担ではなかったと回答している。また、「より負担なく実行するには」、「一か所に集約する取組があればより良い」という意見があった。

「2. サポートファイルりあんについて」は、1名を除き「有効であった」と回答している。具体的には、全員が「家、学校、事業所の情報が共有できた」という意見であった。また、「幼児期からの経過を知ることができた」「一日の流れや実態が、分かりやすく記載されている」「新人職員が本人の情報を把握するには、とても有効である」「アセスメントを深めることができた」という意見もあった。

「3. 関係者会議について」は、全員が「有効」と回答している。具体的には、「家、各機関での本児の実態が分かる」「他機関の進捗状況を把握できたと共に、情報共有することで、同じベクトルに向かって目標設定できた」「家族の思い、本人の成長を皆で共有する機会がなかなかないので、大変良い」という意見があった。その反面、事前準備に対する意見もあった。

2年間実施した結果、サポートファイル「りあん」を活用して、家族を含む関係者会議を行うことは、情報や対応方法の共有化を図り、支援目標に対して統一した取り組みを行う上で有効であった。